



PEPTIDE NEWSLETTER JAPAN

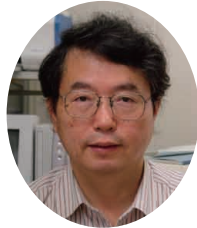
No.74 **国際ペプチドシンポジウム (IPS) 特集** 2009年10月

THE JAPANESE PEPTIDE SOCIETY

<http://peptide-soc.jp>

第46回ペプチド討論会開催に向けて

今年の11月4日(水)～6日(金)の3日間、第46回ペプチド討論会を福岡県北九州市小倉区にある北九州国際会議場で開催します。本討論会は九州工業大学で世話させていただいていますが、九州大学、佐賀大学等の近隣の大学からの協力も得て開催の準備を進めています。実働部隊として実行委員長である情報工学研究院の岡元孝二、実行委員である情報工学研究院の坂本寛准教授、情報工学研究院の大内将吉准教授、生命体工学研究科の加藤珠樹准教授、情報工学研究院の前田衣織助教、事務職員の園木ゆかの計6名で運営しています。



岡元 孝二

日本ペプチド学会は、今や世界のペプチド科学を推進する一つの極としてアメリカペプチド学会、ヨーロッパペプチド学会に次いで大きな役割を果たしています。日本ペプチド学会の活動の中核をなすものが毎年開催されるペプチド討論会であり、今年で第46回ですが、1年置きに開催されているアメリカペプチドシンポジウムが今年で第21回、ヨーロッパペプチドシンポジウムが昨年で第30回ですので日本のペプチド討論会も非常に歴史のある討論会ということになります。

本討論会は、我が国のペプチド科学および関連分野の研究者が研究成果を発表・公開し、情報交換を行う場として大きな役割を果たすとともに、研究成果を社会に還元し、国民の福祉・健康・利益に貢献することを目的としています。昨年は、第45回ペプチド討論会(世話人:東京薬科大学 野水教授)が東京で開催され、国外からの多くの参加者を含めて約540名の参加がありました。本年度のペプチド討論会にも、例年通り韓国からの招待講演者をはじめ諸外国からの参加者が予定されています。世界のペプチド科学研究の中での日本ペプチド学会の主導的役割を意識し、本年度も口頭発表(若手および一般)の約1/2は英語での講演であり、ポスターは全て英語での発表となります。現在、若手発表数が20、一般口頭発表数が20、招待講演数が3、ポスター発表数が140登録されています。

第46回ペプチド討論会では、近年の情報科学の発展を踏まえて新たに「ペプチドインフォマティクス」という課題を取り上げ、討論会3日目に東京大学生産技術研究所の佐藤文俊教授による招待講演を企画し

ています。この課題を加えて、1) アミノ酸およびペプチドの化学、2) 生理活性ペプチドの単離・構造決定および合成、3) ペプチド合成の新規な戦略と方法論、4) ペプチドの構造-機能相関、5) ペプチドの医学・薬学的研究、6) ペプチドインフォマティクス、7) ペプチドに関連したケミカルバイオロジー、8) ペプチドの構造解析、9) ペプチドのバイオマテリアルへの応用、10) その他広くペプチド科学に関する研究を中心課題に取り上げ、成果の発表や情報交換の場としての役割を果たしていきたいと考えています。

本年度の討論会も昨年と同様に若手口頭発表を企画し、討論会1日目に若手口頭発表セッションを予定しています。東海大学の北條裕信先生を審査委員長、佐賀大学の佐藤孝先生を副委員長、若手の先生方を審査委員として若手最優秀発表賞1名、優秀発表賞9名を選考していただくことにしています。また、例年通り、若手研究者の育成・活性化を願い、若手ポスター賞を設けることにしています。さらに韓国ペプチド学会との交流を目的として、2名の招待講演を本年も行うとともに、韓国ペプチド学会に対して広く参加を呼びかけており、より親密な日韓学術交流を目指し努力しています。企業展示に多くの参加者が集まっていたことを願って、本年度はスタンプラリーを試しに実施したいと考えています。企業展示の全てのブースでスタンプを押してもらいますと、日本ペプチド学会のロゴマーク入りのT-シャツが貰えるように企画しています。多くの参加者がスタンプラリーにご参加して下さることを期待しています。

尚、ペプチド討論会の終了日の翌日の11月7日(土)には北九州国際会議場で日本ペプチド学会主催の市民フォーラム2009を開催します。今年の市民フォーラムのテーマは「環境にやさしく健康を守る万能素材-アミノ酸・ペプチド-」です。市民フォーラムの冊子を3000部作製しています。この冊子を社会人、大学生、高校生等の多くの市民に幅広く配布し、アミノ酸・ペプチドについて理解や興味をもっていただくとともに、アミノ酸・ペプチドを通して生命科学や自然科学の面白さを身近に感じていただきたいと思います。

最後になりましたが、第45回ペプチド討論会を開催するにあたり、多数の企業・財団からの賛助金および広告や企業展示へのご参加・ご支援をいただき、心より御礼申し上げます。

おかもと こうじ
九州工業大学大学院情報工学研究院
okagen@bio.kyutech.ac.jp

国際ペプチドシンポジウム (IPS) 特集

IPS特集号を記念し、IPS開催にいたるまでの歴史を榭原先生にご寄稿頂きました。さらに、第1回IPSの組織委員長の下西康嗣先生をはじめとして、各回に参加された諸先生に、往事の思い出をご執筆頂きました。なお、IPSの開催時期と開催地は下記の通りです。

| | 開催年 | 開催時期 | 開催地 | 併 催 |
|-----|------|--------------|---------------|---|
| 第1回 | 1997 | 11月30日～12月5日 | 京都（日本） | |
| 第2回 | 2001 | 6月9日～14日 | サンディエゴ（USA） | 第17回アメリカペプチドシンポジウム |
| 第3回 | 2004 | 9月5日～10日 | プラハ（チェコ共和国） | 第28回ヨーロッパペプチドシンポジウム |
| 第4回 | 2007 | 10月21日～25日 | ケアンズ（オーストラリア） | 第7回オーストラリアペプチドシンポジウム 第2回アジア太平洋国際ペプチドシンポジウム |

IPSの始まり

ペプチド化学討論会誕生の頃

私が大阪大学を卒業したのは1951年、大阪大学に蛋白質研究所が開設されたのが1958年、その蛋白研が今五十周年の記念式典を迎えようとしている。私が大学を卒業した頃の文献にはdu Vigneaudによるオキシトシンやバソプレシンの合成に関連した論文が次々と発表されていた。それらを見て世界中の科学者が一斉にペプチド合成に注目するようになったのは間違いない。私も何とかしてそれらを合成しようと思い頑張ってみたが、どうしても文献通りの方法ではうまく合成することが出来なかった。間もなく学位が取れたので、1960年秋からアメリカのコネル大学に留学することにした。丁度一年ばかりが過ぎた頃、恩師の赤堀先生がコネルに立ち寄られて「来年はじめには蛋白研にペプチドセンターというものが開設されるから帰国したらその面倒をみるように、また、その年の秋には蛋白研でペプチドに関するセミナーを開きたいからそれまでには帰国するように」と念を押された。そのセミナーには全国各地からペプチド合成に興味をもった30数名の研究者が集まり、13件の発表と討論が行われた。懇親会の席上、誰からともなく「これからもこのようなセミナーを続けたい」との声があがり、それが現在のペプチド科学討論会に発展したのである。当時はまだワープロも無かった時代なので、セミナーの記録類は総て手書きの原稿をそのままコピーして製本され、今も財団法人蛋白質研究奨励会（奨励会）の資料室に残っている。実は私がアメリカに留学する前の1958年にも、赤堀先生が阪大理学部金子先生、芝先生、大川先生らに声をかけられて、当時Greensteinの所から帰国されたばかりの九大理学部の泉屋先生をキリンビールの尼崎工場にお招きになり、ペプチドに関するセミナーを開催されたことがあった。会のあとビールを頂きながら先生は「今後もこのような会を続けられないか」と我々に水を向けられたが、肝心の芝先生や大川先生が私より先にアメリカへ留学してしまわれたため、日本



榭原 俊平

におけるペプチドセミナーの開催は1962年からということになってしまったのである。

ヨーロッパでは1958年にチェコスロバキアのプラハで、Rudinger教授の呼びかけによって第1回のペプチド討論会が開催され、それ以後毎年各国持ち回りでシンポジウムが開かれるようになった。しかしアメリカでこのようなシンポジウムが開かれたのはヨーロッパより10年ばかり遅れてのことである。

ヨーロッパのシンポジウムでは主な国々から選出された委員により、各国からの出席者数や次の開催地、世話役などが細かく決められた。それというのも当時のヨーロッパにはチェコスロバキア、ハンガリア、オーストリア、ポーランド、東独といった、当時東側に取り込まれていた地域にも数々の古い大学や製薬企業があり、多くの教授や専門家達が活発な研究活動を行っていたが、東西の間には厳然たる経済格差があったため、東側の人たちには会の運営にかかる費用を負担する能力がなかったからである。従って一回のシンポジウムに参加しようとする人数は総数100人ばかりに制限されていたため、ヨーロッパ地域外からこのシンポジウムに参加しようとすれば、その都度委員の誰かに頼んで事前の了解を得なくてはならなかったのである。

私ははじめてヨーロッパのペプチドシンポジウムに参加したのは1966年のことであった。どうしても自分の仕事を世界の檣舞台にぶつけてみたいと思い、赤堀先生をお願いしてRudinger教授に直接紹介状を書いていただき、オランダの静かな海辺リゾートで開かれた第8回シンポジウムに参加することを許された。ヨーロッパの研究者達は、こういった討論会はお祭り騒ぎをする場ではなくて、自分の研究結果を持っている少数のエキスパートが集まり、真剣な討論を交わす所だという考え方をしていたので、地元の学生でさえ、それらの会議に参加することは歓迎されていなかった程である。おかげで私はRudingerはじめ、私の発表の司会をしてくれたWuensch教授、それに当時すでにガスクロとマスで微量の光学異性体の検出と定量に成功していたWeygand、インスリンの液相合成を行ったZahn、天然物の構造決定をやっていたWieland、それにアメリカから来てインスリンの固相合成について発表したMerrifieldらと個人的に知り合うことができ、シンポジウムの帰途それらの先生

方の研究室を訪ねる機会も与えられた。

ペプチドシンポジウムにまつわる世界の情勢を知るにはその一覧表を作ってみればよくわかる。この表からも我々日本のペプチドグループが如何に早くから活動を開始し、世界に伍して健闘していたかがよくわかる。ヨーロッパの学会は初めから英語を公式言語として採用していたので、時には討論に行き詰まることもあったが、その時にはいつも英、独、仏、露語の会話に堪能なRudinger教授が立ち上がって通訳を引き受けていた。アメリカの学会は最初から世界中に向けて門戸を解放し、世話役を引き受けた先生方によって自由に企画運営されていたため、はじめの数年間には米・欧の学会が同じ年に開かれるようなこともあった。しかしそれでは、両方のシンポジウムに参加したいと希望する者にとっては何かと不

便だということになり、その後両者の間で何らかの話し合いがもたれたものと思われ、それ以降は規則正しくお互いに一年置きに開催されるようになった。ということは、この二つのシンポジウムを合わせると事実上“The International Peptide Symposium”が出来上がってしまったことを意味する。そうすると、日本のように欧米以外の国が自国で国際シンポジウムを開催しようとしても、その開催年度は必ず欧米のどちらかの学会と重なることになり、それらを押しつけてまで成功に導くことは容易ではないことを意味する。その様な重大な決定が我々の存在を無視して欧・米の間だけで簡単に決められたことを知った時、我々日本の研究者は何か自分達が無視されたような情けない気持ちを味わわれたので、その後欧米の学会に出かけるたびに各国の主な研究者

第一表 世界の主なペプチドシンポジウム 一覧

| 年代 | ヨーロッパ | アメリカ | 日本 | 赤堀コンファレンス | 年号 |
|------|-------------|----------------|--------|------------------------|--------------|
| 1958 | 1 チェコスロバキヤ | | 0 尼崎 | | S 33 |
| 1959 | 2 西ドイツ | | なし | | 34 |
| 1960 | 3 スイス | | なし | | 35 |
| 1961 | 4 ソビエト連邦 | | なし | | 36 |
| 1962 | 5 英国 | | 1 大阪 | | 37 |
| 1963 | 6 ギリシャ | | 2 大阪 | | 38 |
| 1964 | 7 ハンガリヤ | | 3 大阪 | | 39 |
| 1965 | | | 4 大阪 | | 40 |
| 1966 | 8 オランダ | | 休み | | 41 |
| 1967 | | | 5 京都 | | 42 |
| 1968 | 9 フランス | 1 New Haven | 6 福岡 | | 43 |
| 1969 | 10 イタリア | | 7 東京 | | 44 |
| 1970 | | 2 Cleveland | 8 大阪 | | 45 |
| 1971 | 11 オーストリア | | 9 静岡 | | 46 |
| 1972 | | 3 Boston | 10 札幌 | | 47 |
| 1973 | 12 東ドイツ | | 11 金沢 | | 48 |
| 1974 | 13 イスラエル | 4 New York | 12 京都 | | 49 |
| 1975 | | | 13 東京 | | 50 |
| 1976 | 14 ベルギー | | 14 広島 | | 51 |
| 1977 | | 5 San Diego | 15 大阪 | | 52 |
| 1978 | 15 ポーランド | | 16 福岡 | | 53 |
| 1979 | | 6 Washington | 17 東京 | | 54 |
| 1980 | 16 デンマーク | | 18 西宮 | | 55 |
| 1981 | | 7 Madison | 19 名古屋 | Jpn-US Peptide Seminar | 56 |
| 1982 | 17 チェコスロバキヤ | | 20 豊中 | | 57 |
| 1983 | | 8 Tucson | 21 筑波 | Japan Day Munich | 58 |
| 1984 | 18 スウェーデン | | 22 福岡 | | 59 |
| 1985 | | 9 Toronto | 23 京都 | 1 Eibsee | 60 |
| 1986 | 19 ギリシャ | | 24 東京 | | 61 |
| 1987 | | 10 St. Louis | 25 神戸 | JASPEC'87 | 2 Kasikojima |
| 1988 | 20 西ドイツ | | 26 東京 | | 63 |
| 1989 | | 11 San Diego | 27 静岡 | | H 1 |
| 1990 | 21 スペイン | | 28 大阪 | | 2 |
| 1991 | | 12 Boston | 29 東京 | | 3 |
| 1992 | 22 スイス | | 30 静岡 | JASPEC'92 | 4 |
| 1993 | | 13 Edmonton | 31 明石 | | 5 |
| 1994 | 23 ポルトガル | | 32 福岡 | | 6 |
| 1995 | | 14 Columbus | 33 札幌 | | 7 |
| 1996 | 24 スコットランド | | 34 筑波 | | 8 |
| 1997 | | 15 Nashville | 京都 | 1 st IPS | 9 |
| 1998 | 25 ハンガリヤ | | 35 佐賀 | | 7 Heidelberg |
| 1999 | | 16 Minneapolis | 36 京都 | | 11 |
| 2000 | 26 フランス | | 37 名古屋 | | 8 Awaji |

達と話し合い、何とかして我々も含めた国際会議を早く立ち上げて欲しいと訴えたが、現実に全く不便を感じていない彼らの目をこちらの方に向けさせることは容易なことではなかった。その問題を解決するためには我々自身にも克服しなければならない大きな問題があったからである。

はじめにも述べたように日本のシンポジウムは蛋白研のセミナーから出発したため、最初の数回こそ大阪で開催されたが、その後は研究者が大勢いる京都、東京、福岡、札幌へと引き継がれていった。また、開催を引き受けて下さった先生方もその土地ならではの趣向をこらした楽しい懇親会を準備して下さり、それがまた出席する者たちの楽しみとなっていた。しかし、肝心のシンポジウムが常に日本語で行われていたのは勿論である。我々は日本語で討論することにより、何の不自由もなくその成果を最大限に共有することができ、日本人のための討論会としては大いに成功を納めていたので、参加者層も薬学、農芸化学、生化学の分野へと幅広く広がっていった。その内に、海外のペプチドシンポジウムに参加する人達が増えるようになり、日本人だけで日本語で討論しているこのシンポジウムのあり方に物足りなさを覚える人達も増えてきたのである。やはり討論会というものは国籍を問わず学問の第一線に立つ研究者が自由に意見をぶつけ合い、切磋琢磨してこそ意義がある。そのためには我々が海外のシンポジウムに出かけて行くだけではなく、海外の研究者が日本のシンポジウムにも自由に参加しうような環境をつくらなければいけないと気がついたのである。そういう意味でヨーロッパのシンポジウムが初めから英語を公式言語として採用していたのは成功であったといえる。それを意識するようになってから我々もシンポジウムのプログラムや議事録を英語で書くように努力した。また、積極的に外国の友人知人に声をかけて日本のシンポジウムに参加してくれるように勧めた。しかし、肝心の討論が日本語で行われているような状況下では外国からの参加者が増えることを期待すること自体に無理があった。結局我々自身が覚悟を決めて、日本の討論会もどこかで英語で発表し討論するような場を作らなければ駄目だと気がついたのである。私は2年間アメリカの大学で仕事をしてきたが、果たしてどれだけ英語がしゃべれるようになったらうかと考えてみるとその難しさがよく分かる。ことペプチド合成に関しては英語で彼らとディスカッションすることに何の不自由も感じていなかった。しかし、他の分野の会話となると話は全く別である。2年程度の海外生活でテレビやラジオで飛び交っている現地人の会話を理解することが如何に難しいかはよく分かっていた。ましてそのような不利な立場にある我々が日本人の本音を英語で伝えて彼らを説得するのがどれだけ難しいことかも。

日本からのアプローチ

その様な状況下であって、我々自身も何とかして海外の研究者達の目をこちらへ向けさせるための努力をしなければいけないと思った。その第一回目の

試みが蛋白研における国際セミナーの開催であった。丁度1980年が赤堀先生の満八十才の記念すべき年にあたるので、それを名目に世界の指導的な立場にあるペプチド研究者十数名を日本に招待することにしたのである。招待状を出したのはアメリカのM. Goodman, E. Blout, M. Ondetti, D. Kemp, K. Kopple, J. Meienhofer, H. Sheraga, J. Schellman教授らで、それにヨーロッパのG. T. Young, Th. Wieland, E. Wuensch, R. Schwyzer教授らと中国のC.I. Niu先生とであった。残念ながらドイツからのお二人は、他の行事と重なったためこの会議には出席していただけなかったが、それ以外の先生方はすべて来日して下さった。私は遠路はるばる大阪まで来て下さった先生方と個人的にも親しくならねばと思い、芝先生、京極先生、小林先生らの奥様にも手伝っていただいて我が家でささやかなホームパーティーを開いた。セミナーは矢島先生のRNase Aの全合成をはじめ日本の先生方の講演を中心にして3日間にわたって行ない、日本のペプチド化学のレベルの高さを参加者全員に印象付けるべく努力した。セミナーの最終日にSquibb研究所のOndetti氏が軽妙なタッチでペプチド化学の未来を予言されたが、その講演からもこのセミナーが如何に成功であったかを伺い知ることが出来た。その時の状況については芝先生が奨励会の広報誌PRFの第5巻2号に詳しく書いておられる。また各講演の内容はJapan-U.S. Seminar on Peptide Chemistryの特集号として*Biopolymers*, **20**, No. 9 (1981) に全文収録されているので是非ご一読願いたい。

後ほど、このセミナーに参加できなかったWuensch先生から「1983年6月にミュンヘン南で“Japanese Day Munich”と名付けるセミナーを開催するから是非出席して欲しい」との招待状を頂いた。招待を受けたのは矢内原先生、芝先生、大川先生と私の4名であった。これは南ドイツの山岳地帯に古くからある城をMax-Planck財団が買い取り、その優雅な外観を残したままセミナーが開催できるような近代的な施設に改装したもので、当日は我々だけでなくドイツの各地からも十数名の主な先生方が参加された。セミナーの終了後、Wuensch先生から「今後、日・独の間で一年置きにペプチドに関するセミナーを開催しようではないか」との提案があり、それが今も行われている日・独ペプチドセミナーに発展したのである。このセミナーは、Wuensch先生が昔学生時代を過ごされたのと同じチェコスロバキアのWaldschmidt-Leitzの研究室に、以前赤堀先生が留学しておられたことにちなんで「赤堀コンファレンス」と名付けようと提案され、全員が賛同して今も「赤堀コンファレンス」の愛称で呼ばれている。ドイツ人は自分たちこそペプチド化学の創始者であるEmil FischerやCurtiusの伝統を引き継ぐものだと自負しているので、ドイツ語をしゃべる国々であるドイツ・オーストリア・スイス・北イタリアの研究者達が集まって、毎年チロル地方の山小屋でドイツ語で討論するペプチド討論会(Max Bergmann Conference)を開催している模様なので、赤堀コンファレンスのアイデアもその延長線上から出てきたものと思われる。いずれにしてもこのことは、Wuensch先生が我々の業績と能力を率直に認めて

下さったことの何よりの証拠だと信じている。この赤堀コンファレンスは両国で毎回20名程度の参加者を募り、それらの人達の往復旅費は自前で支払うが、セミナーのための滞在費は現地のホスト側が負担するというルールで開始された。それに対処するために我々も「赤堀コンファレンス協会」なるものを立ち上げてそのための基金を確保することにした。

第一回目の赤堀コンファレンスは1985年ドイツとオーストリアの国境近くにある小さな湖畔のホテルで開催された。そして話し合い通り、第二回目は1987年に日本の賢島で開催されることになり、それ以後2年おきに独・日交互に泊まり込みのセミナーが行われた。そして我々は、1987年の赤堀コンファレンスの終了後、それに引き続いて神戸でJASPEC'87を開催することにしたのである。このJASPEC'87は我々自身が周到に準備し、満を持して開催した初めての国際会議で、約600件の参加申し込みがあり、そのうち海外18カ国から130名以上の外国人参加者を集めることができた。この国際会議には大阪神戸在住のペプチド学会の会員諸兄姉が献身的に手助けしてくださり、おかげ様で会議の運営のみでなく懇親会から観光旅行にいたるまで、総てが予想以上にうまく進転し、参加者の皆さんに満足していただくことができたのである。このJASPEC'87の成功により今まで我々を覆っていた薄暗いわだかまりの雲は総て払拭され、それ以後の海外との折衝は何事も極めてスムーズに行えるようになった。

その後の展開

JASPEC'87と同じ1987年にアメリカンペプチドシンポジウムの開催を受け持ったのはWashington大学のGarland Marshall教授であった。そのシンポジウムの直前に私は彼から一通の手紙を受け取り「もうこれ以上大学の一教授がシンポジウム開催のためにエネルギーを消耗することは出来ない。みんなで専門の職員を雇って世界中のペプチド研究者が参加できるような“The Peptide Society”を設立しようではないか」と呼びかけてきた。そして具体的なことについては今後のペプチドシンポジウムの度毎に話し合いの場を設けて相談しようとして伝えてきた。おかげで、それからは日本だけが蚊帳の外におかれるようなことはなくなり、毎年各国の責任者の間で話し合いのための小委員会が開催されるようになった。ヨーロッパも1988年の年會を境にして古くからあった参加者制限の枠を取り払った。その頃Oxford大のYoung教授からは各地域でそれぞれの事情に応じてペプチド学会を立ち上げ、それらの間で学会連合(Federation)を結成してお互いに連絡し合いながら運営してはどうかといった妥協案も示された。その頃の我々は、せっかく相談の場に出席しても果たして会議で飛び交う各国の意見を総て正しくキャッチできていたかどうか心配になる位であったが、有り難いことに米ロッシュ社のArthur Felix氏がその都度明確な議事録を作成して全員に配布してくれたので大いに助かった。かくして、結果的には日・米・欧がそれぞれの事情にマッチしたやり方でペプチド学会を結成し、お互いに連絡し合いながら運営するという妥協案で落ち着

き、それ以降、それら3学会は共に、今までの世話人による申し合わせだけで運用するような体制から正式の規約に基づき民主的に選出された役員によって運用される学会体制に移行したのである。それは1990年頃の事であった。アメリカは「会費さえ払えば誰でも、世界のどの地域に住んでいる人でもアメリカペプチド学会のメンバーになることが出来る」としたが、ヨーロッパは「学会の会員になるにはヨーロッパ地域の在住者であることが条件で、各個人からは会費を取らない代わりに、会の運営に要する費用は企業からの寄付金とヨーロッパで行われるシンポジウムの剰余金でまかなう」ことに決まった。我々のところでは、今までの日本語で討論するシンポジウムはそのまま残し、JASPEC'87以降5年ごとに英語を公用語とする国際学会を開催するという線で申し合わせが行われた。その線に従って開かれた初めての国際会議がJASPEC'92で、矢内原先生によって静岡で開催されたものである。そして、申し合わせにより静岡のJASPECはそれまでの第30回年會と一致させることになった。その線で行くと前回のJASPEC'87は第25回の年會ということになるので、それ以後の年會番号はそのルールに従って付けられた。幸い静岡でのJASPECは前回にもまして大成功を収めたのは申すまでもない。それが更に五年後に京都で開催された下西先生による第一回のIPSに引き継がれることになったのであるが、私はその頃にはすでに引退してしまっていたため、その時どういうルールによってIPSが運営されたのかについてはよく知らない。その辺の事情は、その都度学会のニュースレターに詳しく報道されているのでご覧いただきたい。

今後の問題点

IPSのような国際会議を開催するには莫大な費用を必要とする。それらの経費を参加した人達にそのまま割り振って分担してもらうことが出来れば問題はない。しかし、ホテルでの宿泊費から食費までが非常に高くつく日本で遠来の客をもてなそうとするにはどうしても無理がかかってしまう。そこで、どれだけ浄財を集めることができるかが学会責任者の腕の見せ所となる。しかし、本年のように世界中が同時大不況に陥ってしまったときにはどうすればいいのだろうか。数年前から、日本で国際会議を開催するように仕向けようとする外部からの圧力が一部にあることは薄々感じていたが、それは日本が特に経済的に豊かだと思われて狙われていたからに相違ない。私はJASPECの頃から、少しでも資金に余裕があればペプチド学会としては次期の国際会議開催のために貯金しておくべきだと思っていたが、今となつてはそのアイデアも焼け石に水なのかもしれない。同じ資金を使っても、もっと安く、しかも参加者全員に満足してもらえるような学会を運営することは出来ないものだろうか。皆さんも知恵を出して考えていただきたい。今後のご健闘を祈ります。

さかさばら しゅんぺい
財団法人蛋白質研究奨励会 理事
s-sakaki@taupe.plala.or.jp

—第1回国際ペプチドシンポジウムを組織して—

第1回国際ペプチドシンポジウム (First International Peptide Symposium) を、1997年11月に、日本において開催して以来、第2回、第3回が、それぞれ米国、欧州において開催し、また、第5回を、再び、日本において開催されること、大変喜ばしく思います。

編集委員より、第1回国際ペプチドシンポジウムの組織委員長を仰せ使った小生に、当時の状況をとの依頼を受けました。すでに12年近い歳月が過ぎておりますので、不確かなところも多々ありますが、記憶を思い起こしながら、少し述べさせていただきますかと思えます。

1997年前後と思いますが、アメリカ、ヨーロッパにおいて、それまで、任意団体として運営されていたペプチドシンポジウムが学会として組織、運営されることになり、日本においても、日本ペプチド学会を発足するようになりました。この機会に、アメリカペプチドシンポジウムとヨーロッパペプチドシンポジウムは、毎年交互に開催され、国際的なシンポジウムとして認識されていましたが、日本で開

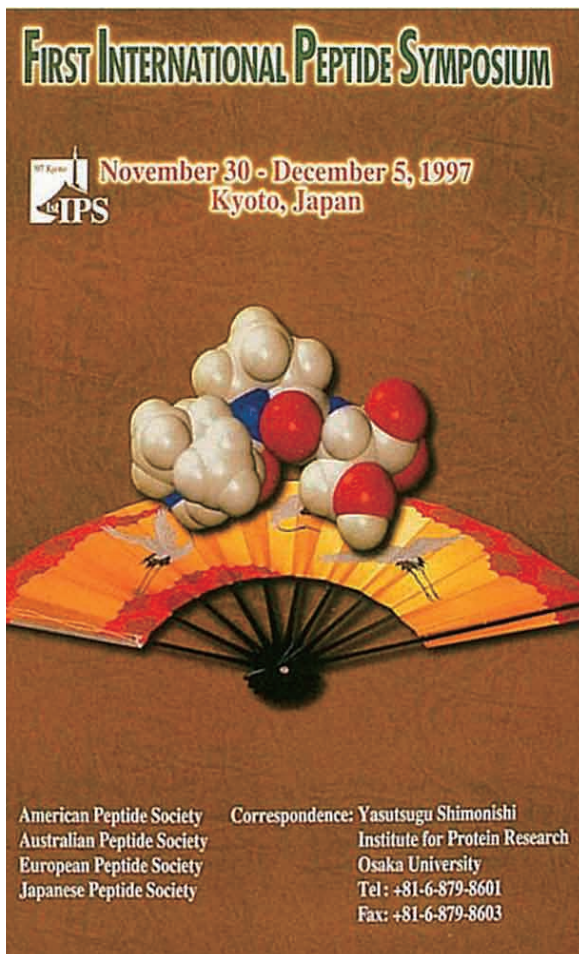


下西 康嗣

催されるペプチドシンポジウムをアメリカ、ヨーロッパに加えて国際ペプチドシンポジウムの一つにできないものかと強く願うようになりました。(それまで、2度、国際ペプチドシンポジウムが開催されておりましたが。)そして、日本ペプチド学会のメンバーが、アメリカ、ヨーロッパで開催されるシンポジウムやそれぞれの学会の理事会(運営委員会)に参加して、その希望を伝えるとともに、提案を行いました。そして、諸先輩の多くの努力が実って、1997年に、日本において、アメリカペプチド学会、ヨーロッパペプチド学会も参加する第1回国際ペプチドシンポジウムが開催されることになりました。小生も、微力ながら、アメリカ、ヨーロッパでのペプチドシンポジウムのレセプションにおいて、日本での開催をPRしたことを記憶しております。

日本での開催は、アメリカ、ヨーロッパそれぞれのシンポジウムが6月と9月に毎年交互に開催されていることから、できるだけ時期が重ならないように、11月下旬、または、12月初旬とすることにいたしました。当初は、京都国際会議場を予約して、欧米を始めとするペプチド及び関連する研究者へのPRの準備を始めましたが、少し経ってから、地球温暖化防止のための政府間パネル(所謂、COP)が日本で開催される(今日でも京都議定書として公表されている会議)ことになり、しかも、我々が開催を予定していた京都国際会議場で、同じ時期に行うことが決められ、やむなく、京都会館に会場の変更をすることになりました。

シンポジウムの準備、プログラムの作成、当日の運営など、多くの方々に、ここでは1人1人のお名前を挙げることはできませんが、大変お世話をいただきました。本シンポジウムを国際的なものとするため、特に注意を払ったことは、プログラムの作成にアメリカ、ヨーロッパからも参加していただき、plenary, key-note speakersの選考を行ったことでした。今では、当然のことですが、key-note speakersとして希望する演者のアブストラクトを4段階で評価し、選定いたしました。この種のシンポジウムを日本で開催する指標となったのではないかと考えています。Plenary-speakerとして招待



(写真提供：岩井 道夫)

した Dr. J. Wales がその後も素晴らしい研究成果をあげていることやkey-note speaker として招待した Dr. K. Wüthrich がその後ノーベル賞を受賞したことなど、良い機会となったと思います。

シンポジウム開催中、日本、アメリカ、ヨーロッパ学会の理事会メンバーが集まって、第2回、第3回を3年間隔で開催することを決めましたが、第2回をアメリカ、ヨーロッパいずれで行うか、なかなか決まらず、最後は Dr. J. Rivier が爪楊枝を数本用意して、1本に印をつけ、交互に楊枝を引き、印のついた楊枝を引いたアメリカに決まるというようなことも思い出としてあります。

今では、欧米に限らず世界の何処において開催される学会に参加することは容易となってきています。日本で開催すると多額の運営費が掛かり、また、会議を準備するために多くの時間と労力をさかねばならないために、必ずしも日本で行う必要はないとの意見もあろうかと思えます。しかし、日本の研究者も他国の研究者の研究成果を利用し、その上に研究を行っていることを考えれば、日本において世界の多くの研究者が研究成果を分かちあえる、互いに face-to-face, eyes-to-eyes に議論することのできる場を提供することも日本の研究者の責務でもありましょう。今回、再び、国際ペプチドシンポジウムが日本で開催されることになり、このような場になることを願っておりますし、また、日本ペプチド学会の会員の皆さんが素晴らしい研究成果を発表し、諸外国の研究者と成果を享受されることを強く期待しています。

しもにし やすつぐ
大阪大学名誉教授
長浜バイオ大学長
y_shimonishi@nagahama-i-bio.ac.jp

第1回国際ペプチドシンポジウム(京都)の思い出

第1回国際ペプチドシンポジウム(1st IPS)は、大阪大学蛋白質研究所(当時)の下西康嗣先生がChairを務められ、1997年11月30日から12月5日にかけて京都会館ホールにて開催されました。当時、私は蛋白質研究所の相本三郎先生に助手として採用されてから3年目で、まだ20代の頃でした。学生時代にはペプチドとは縁がなく、この年のAPSを含めて4回目のペプチド関連学会への参加で、初めての国際学会での発表の機会でした。Cys(Acm)を用いるチオエステル法によるCys含有長鎖ペプチドの合成法の開発に関するポスターでした。英語が苦手な私は相本先生に助けをいただきながら片言の英語で説明をしていたように記憶しています。ここ数年、英語で講演する機会を数回いただきましたが、やはり英語には苦勞をしています。最近、ペプチド討論会でも英語講演が増え、学生の皆さんが立派に英語で



川上 徹

かわかみ とおる
大阪大学蛋白質研究所
kawa@protein.osaka-u.ac.jp

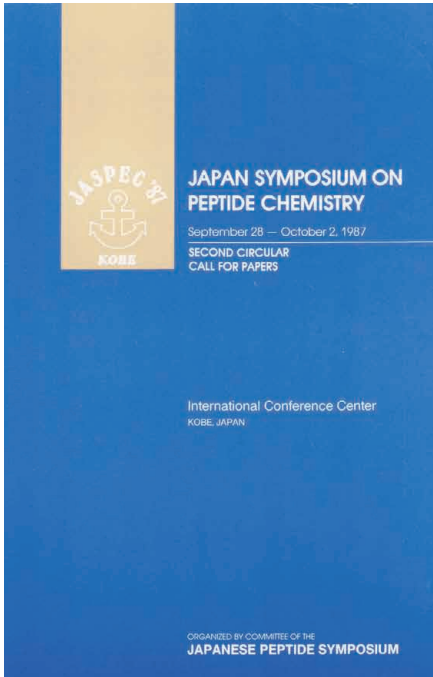
講演されているのを聞くと頼もしく思われます。

さて、英語の苦手な私が1st IPSでは講演スライド映写係を担当させていただきました。当時はマウントフィルムを会場後方の映写機から投影していました。会場係の相本先生の監督のもと、西尾秀喜さん(ペプチド研)、北條恵子さん(神戸学院大)、長谷川功紀君(当時相本研究生)とともに4人で担当しました。連日朝9時過ぎからポスター発表を挟んで5時半ごろまで、1日につき5時間ほどの間でした。2人1組になり交互に操作していたように思いますが、時には併写の場合もあり4人総がかりで操作することもあったように思います。英語に集中して、タイミングを逃さないように注意してスライドを進めて、フォーカスを確認する。時にはスライドを戻すようにリクエストされることも。‘特等席’で講演を聞いているわけですから、英語が不自由な割に、講演を楽しんでいたように記憶しています。しかし、最初のうちはいいのですが、徐々に集中力も途切れてきて‘next ¥\$’に反応して、先走ってスライドを進めてしまったり、逆に反応が遅れたり。互いに肩をつついてカバーしていたように思います。学会でみっちり講演を聞くことは大変ですが、1日中‘強制的’にすべての講演を聴いていると、夕方にはぐったりとなっていました。また、普段はない‘遠距離通勤’で、大阪から2時間近くかけて通っていたことも疲れの原因だったでしょう。

これらの講演の中に、4年後から米国で1年間過ごした時にお世話になった人の講演がありました。化学合成には関連しない講演でしたが、米国ではその時の講演テーマに化学合成に関連させた研究をさせていただきました。

来年、2010年12月に5th IPSが再び日本で、木曾良明先生と藤井信孝先生がChairを務められ、京都国際会館で開催されます。1st IPSも当初は京都国際会館で開催される予定でしたが、直後に地球温暖化防止京都会議(COP3)が京都国際会館で開催されることから、京都会館での開催になったと伺っています。蛇足ですが、COP3は、その後のいきさつはともかくとして、京都議定書が議決された重要な会議です。地球温暖化にかかわらず、省資源、省エネルギーは重要な基本方針だと思います。私自身も京都国際会館へ行ったことはありません。楽しみにしたいと思います。

1987年神戸市で開催されたJASPEC' 87の写真を若宮建昭先生にご提供いただきました。



2nd Circular



榎原先生・芝先生



会場



実行メンバー

| PLENARY LECTURERS | |
|--|--|
| Erich Wunsch (Max-Planck-Institut, München, Germany) | |
| James Tam (The Rockefeller University, New York, U.S.A.) | |
| Roger M. Freidinger (Merck Sharp & Dohme, West Point, U.S.A.) | |
| Günther Jung (Universität Tübingen, Tübingen, Germany) | |
| William R. Gray (The University of Utah, Salt Lake City, U.S.A.) | |
| Bertrand Castro (CNRS-INSERM, Montpellier, France) | |
| Terumi Nakajima (The University of Tokyo, Tokyo, Japan) | |
| Tatsuo Miyazawa (The University of Tokyo, Tokyo, Japan) | |
| OFFICIAL LANGUAGE | |
| English | |

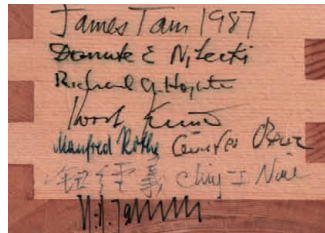
招待講演者



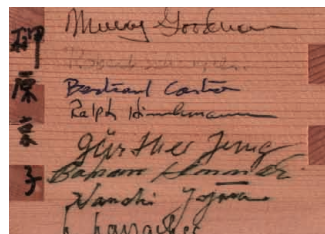
日米欧代表鏡割り



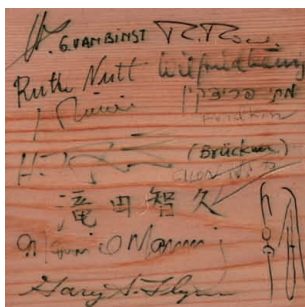
柎 1



柎 2



柎 3



柎 5



柎 6



柎 4

| ORGANIZING COMMITTEE | |
|----------------------|--|
| Chairman: | Tetsuo Shiba (Osaka University) |
| Secretary: | Shumpei Sakakibara (Pharmaceutical Research Foundation) |
| Members: | Nobuo Iramiya (Kurume Institute of Technology) |
| | Kenji Okawa (Kansai Gakuin University) |
| | Haruki Yajima (Kansai University) |
| | Tatsuo Miyazawa (The University of Tokyo) |
| | Tomohisa Takita (Institute of Microbial Chemistry) |
| | Noboru Yamahara (Shizuoka College of Pharmacy) |
| | Yuichi Kanaoka (Hokkaido University) |
| | Shigeru Kuwata (Kansai University) |
| | Akinori Suzuki (The University of Tokyo) |
| | Terumi Nakajima (The University of Tokyo) |
| | Yoshimasa Kyogoku (Osaka University) |
| | Hiroyuki Matsuo (Miyazaki Medical College) |
| | Masahiko Fujino (Takeda Chemical Industries) |
| | Yoshio Okada (Kobe Gakuin University) |
| | Yasutsugu Shimomishi (Osaka University) |
| Endorsed By: | The Chemical Society of Japan The Pharmaceutical Society of Japan The Agricultural Chemical Society of Japan |

実行委員

第2回 IPS参加記

第2回 IPSに関する記事を書いて下さいとの依頼を九州大学松島先生より受けましたが、記憶が定かではありません。まずはプロシーディングをもとに記憶を呼び戻すことにしました。第2回IPSは2001年6月9日から14日の日程でRichard A. Houghten, Michal Lebl先生を



大高 章

Co-Chairとして、米国サンディエゴのTown & Country Hotelにて開催されました(このあたりまではプロシーディングを見れば書ける)。さて、私はこの会議で何をして、何を聞いていたのだろうかということですが、ペプチド屋の中では有機合成が好きな私は、ラジカル化学で著名なD. P. Curran先生、「なぜ、私はペプチドケミストとなったか」というような演題名で講演を時々されているヨーロッパ(いや世界)の有機化学の大御所D. Seebach先生の講演を拝聴させていただいた記憶が蘇ってきました。多分、他にも熱心(?)に聞いたはずなのですが……。ビールを飲んで、様々な人とワイワイやっていたようなことばかりが思い出されます。

あとは何をしていたかということですが、当時、北大におられた野水基義先生とウロチョロ遊び回っていた記憶ばかりがあります。その中で、最も記憶に残っているのは、ラ・ホヤの海岸が見たいと出かけ、その先に見えるSalk Instituteを眺め、あれがSalkかと二人で感慨にふけたことです。なぜ、感慨に、それは1977年ノーベル生理学賞を受賞されたGuillemin教授の研究室がSalkにあったからです。私は、修士課程1年時、野水先生(当時博士1年)の厳しい指導を受けていました。ある日、書店で「ノーベル賞の決闘、岩波現代選書(多分今は絶版)」という視床下部ペプチドホルモンの発見をめぐる2つの研究グループの競争について書かれた書籍を見つけました。Schally教授、Guillemin教授のノーベル賞に向けた決闘です。両者ともノーベル生理学賞を受賞することになります。視床下部ペプチドホルモンの一つであるCRFの合成を行っておられた野水先生にも本のことを教え、そして根がいたって単純な二人は、この本にいたく感銘を受けました。書籍中の登場人物名を出し、……は、頑張った等と言いつつ実験に励んでいたことを昨日のように思い出します。

この様に書いてみると、徐々に記憶が戻って来ました。サンディエゴからロスへの飛行機が突然キャンセルになり、東工大三原先生と航空会社が用意したバスにあれやこれやと言う間もなく、乗せられロスまで送り届けられたこと。大学院時代に中国から留学生として京大に在籍されていた郭さんに約10年ぶりに再会したこと。石坂公成先生が名誉所長をされているラ・ホヤアレルギー免疫研究所を訪問したこと。最近、分子内Redox反応を利用した新合成法を発表したフルオロアルケン型イソスター研究の最初の報告がこの学会であったことなど、短期ですが多くのことがありました。

若い人たちに、海外学会へ行きたくさせるような文章にはなっていません。単に、第2回IPSの思い出を綴らせて頂いたのみで、編集者の意図には沿っていないことをお詫し頂けたら幸いです。

おおたか あきら
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部
機能分子合成薬学分野
aotaka@ph.tokushima-u.ac.jp

第2回国際ペプチドシンポジウムに参加して

1997年に京都で開催された第1回に引き続き、第2回国際ペプチドシンポジウムが、第17回アメリカペプチドシンポジウムとの合同開催として、2001年6月9日~14日、米国のSan Diegoで開催されました。本国際シンポジウムはDr. Richard A. Houghtenと



向井 秀仁

Dr. Michal LeblのCo-Chairのもと、San Diego郊外のTown and Country Resort Hotelで開催されました。私は当時経済産業省・新エネルギー・産業技術総合開発機構のプロジェクト(日本たばこ産業株式会社)に所属しておりましたが、米国留学から帰国後、筑波大学・宗像英輔先生のもとでスタートした新しい好中球活性化ペプチドの精製・測定に関する研究を、このシンポジウムで初めて発表させていただきました。この発表は、私達の「クリプタイド」研究に関して一番最初の発表であり、私の現在の研究は「すべてここから始まった」といっても過言ではありません。この点からも本シンポジウムについての記事を私が依頼されたことは、因縁めいたものを感じております。

さて、改めて当時のAbstractやProceedingsをみると、Proceedings巻頭には“Dedicated to Bruce Merrifield on the occasion of his 80th birthday”とあり、ご本人のMerrifield教授をはじめとして、世界の主だったペプチド研究者が集いました。総参加者数は37カ国1,248名、そのうち日本からは69名で、米国に次いで第二位の参加者数です。2001年は当時世界の生命科学の話題の中心であったヒトゲノムドラフト配列についてScience誌に掲載された年であり、配列解析を行ったCelera社のDr. Craig Venterが招待講演を行い、当時私も少し高揚しながら講演を聴いたのが思い出されます。また本シンポジウムでは、Washington大学のProf. Garland R. MarshallがBruce Merrifield Awardを受賞され、お会いしたときにお祝いを申し上げたのを覚えております。

本シンポジウムでは、確か初めてWebからAbstractやProceedingsの原稿を投稿したと思いますが、私はMacユーザーで、文字化けや図のuploadでかなり苦労して、最後は電話で修正のやりとりをしたような気がします(多分私たちの原稿は、やむをえずスキャナーで取り込みをしたと思います)。

さて、このInternational Peptide Symposiumが開催されるようになった経緯については、本学・京都薬科

大学の木曾良明先生がペプチドニュースレター 43 号「世界のペプチド学会事情」に簡潔に述べられておりますので、ご参照いただければと思います。

2010 年、第 5 回国際ペプチドシンポジウムが、木曾良明先生と京都大学の藤井信孝先生の Co-Chair で、第 1 回に引き続き京都で開催されるということには感慨深いものがあります。是非とも盛会にすべく、皆様方のご協力、ご支援をお願い申し上げます。

むかい ひでひと
京都薬科大学薬品化学分野
hmukai-endo@umin.ac.jp

第 3 回 IPS (2004 年) に参加して

日・米・欧・豪とバトンタッチされてきた IPS が、十二支とともに天球ならぬ地球を「一回り」して正子の京都に再び帰ってきます。この「一回り」は、何れの IPS にも参加し、さらには発表の機会にも恵まれた私にも、「一回り」の刻印（実際には来年で 13 年！）と脂肪の装飾を残しました。IPS は通例の JPS, APS, EPS, APC 以上に文字通り国際色豊かに、ペプチド科学者が参集します。第 3 回 IPS (2004 年) が開催されたプラハに集った 40 数カ国・1,200 有余へのサプライズは、ペプチド化学の父祖と謳われる Joseph Rudinger 生誕 80 年を記念したミニシンポジウムです。登壇したパネリストが、Rudinger 先生が組織した第 1 回 EPS (プラハ、1958 年) にも参加した G.T. Young, J. Jones 教授らのお歴々とあって、万雷の拍手！この意味でもプラハに「一回り」したわけで、こういった趣向も IPS の楽しみの一つです。では、参加発表する当事者にとつての IPS の意義、醍醐味とは何でしょう。私自身の IPS の楽しみ方 (IPS に限らず何れの国際学会でも) は以下に集約できます。① PRESENTATION: 例えちっぽけな成果であっても、発表の機会しかも口頭発表に採択されれば、自然と気合いが空回り気味に。外野からの無駄な努力との声を背に受け乍ら、発音記号とアクセントに格闘します。発表原稿から普段使い慣れない単語・発音し辛い単語を削っていくと、後には



西内 祐二

何も残りません。ここで気を取り直し、自分がアピール出来る事柄を自分の言葉で再構成。頭の中で捏ねくり廻した想定問答も、スペイン訛り・ドイツ訛り・アイルランド訛り・中国訛りの質問に雲散霧消し、日本訛りの英語で防戦一方の螻蛄の斧。しかし、その場の質疑や降壇後も続く質問の中から、今後の仕事の展開を指南する目から鱗の発想・ヒントを頂くことも、しばしば。同質環境での山の批判より、文字通りの異文化 (異分野) 交流で蒙る一刺しには効き目があるようです。② REUNION: バンケットで同席、エクスカッションのバスで隣同士、ホテル (時にはドミトリ) の同室をシェア、または発表の際に質問を下さった方々との再会と近況報告も彩りの一つです。また、若い頃に意欲を胸に集った研究室の同窓会は、理屈抜き・屈託抜きに時空を遡った「自分」に還ることを許してくれます。第 2 回 IPS (サンディエゴ) で、「次回の Group Reunion は第 3 回 IPS !」と仰っていた Murray Goodman 教授が第 3 回 IPS の直前に急逝されたため、プラハでの約束は叶いませんでした。しかし、「Goodman Peptide Family」のメンバーを始めとし、JPS, APS, EPS, APC で得た知己との再会と同時に研究を触発・昇華させるチャンスを、第 5 回・6 回・・・IPS は提供し続けてくれるはず。③ CUISINE: 結局これがメインの目的かと言われてしまいそうですが、サイエンティフィックなプログラムが終われば、IPS 開催国の文化、文化といえば食事とお酒を楽しむ時間です。プラハはバドワイザー発祥の地。米国の同じ名を冠したそれとは既に別の飲み物、香り豊かなリッチなピルスナーです。学生時代をプラハで過ごされた G. Dibó 教授 (ハンガリー) に連れられて出駆けた先は、Franz Kafka の小説にも登場しそうなダイブなビアハウス。席に着くや Cerny (黒ビール) が、腕子そばの要領で運ばれてきます。プラハの料理は、周りの東欧・ドイツ・オーストリア料理をチェコ風にアレンジしたアヒル、猪、鹿、牛、豚、鶏肉にソースをたっぷり掛けてクネドリーキ (パン、じゃが芋ベースの茹で団子) を添えたもの。他には大蒜スープに大満足のプラハでした。但し、スリが多いのもプラハ。特に路面電車での雑踏には十分お気をつけ下さい。

にしうち ゆうじ
(株) ペプチド研究所
大阪大学大学院理学研究科
yuji@peptide.co.jp



バドワイザー



クネドリーキを添えたグヤーシュ

第3回国際／第28回ヨーロッパペプチドシンポジウムに参加して

2004年秋にチェコ（プラハ）で開催された第3回国際／第28回ヨーロッパペプチドシンポジウムに参加する機会を得ました。本参加は日本ペプチド学会の若手研究者参加支援事業の助成によるものです。



相馬 洋平

本シンポジウムでは Young Investigators' Symposium セッションにおいて、私自身初めての英語口頭発表をさせていただきました。質疑応答の際には、Manfred Mutter 教授（École Polytechnique Fédérale de Lausanne）、Leo Benoiton 教授（University of Ottawa）、Morten Meldal 教授（Carlsberg Laboratory）からそれぞれご質問を受けたのを良く覚えています。

本発表では「O-アシルイソペプチド法」という合成法に関する発表をさせていただきましたが、大変幸運な事に、本シンポジウムのチェアの一人である Chaim Gilon 教授（The Hebrew University of Jerusalem）を始め、多くの先生方から高い評価をいただくことができました。また Dr. Bert L. Schram Award を拝受し、プラハ城が描かれた美しい表彰状をいただきました。Speaker's dinner において William Lubell 教授（University of Montreal）から日本語でお褒めの言葉を



図3 speaker's dinnerにて

いただいたのも良く覚えています。

一方、ポスター発表においても大変有意義な discussion をもつことができ、その後発表することになる「クリックペプチド」のアイデアもここでの discussion が大きなヒントとなりました。このような、口頭発表で全体概要を説明させていただき、ポスター発表で詳細に議論することのできる発表形式は理想的であるようにも思います。

私は現在、シカゴ大学・Stephen Kent 教授の研究室に所属しておりますが、留学のきっかけを得たのも本シンポジウムでありました。私が口頭発表した際、同じく若手シンポジウムにて発表していた当時 Kent 研の大学院生と仲良くなり、その縁で Kent 教授にお誘いいただいたという経緯があります。

本国際ペプチドシンポジウムにおける参加・発表が、私のその後の研究活動において大きな財産となったことは間違いございません。ここに、恩師である木曾良明教授（京都薬科大学）をはじめとしてお世話いただいた諸先生方に改めて心より御礼申し上げます。

そうま ようへい
Department of Biochemistry and
Molecular Biology, Institute for
Biophysical Dynamics,
The University of Chicago
ysoma@uchicago.edu



図1 質疑応答中の様子

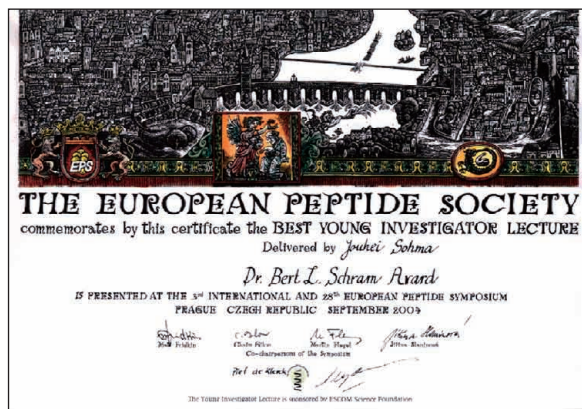


図2 Dr. Bert L. Schram Award表彰状

4th IPSに参加して

今回 IPS 特集ということで執筆依頼を受けましたので、私が参加いたしました4th IPSについて述べさせていただきます。2007年10月にオーストラリアのケアンズで開催された4th IPSは、『Discovery to Drugs: The Peptide Pipeline』というサブタイトルからもわかりますように、ペプチド創薬や疾患関連ペプチド、さらにはドラッグデリバリーシステムや臨床プロテオミクスへのペプチドの応用など『医療とペプチド』の関連に重点



中馬 吉郎

をおいたプログラム構成で実施されました。ケアンズは成田から7時間で到着するという地の利もあり、アジアの国々をはじめ日本からも比較的多くの方が参加されていましたが、ヨーロッパやアメリカからの参加者も数多く見受けられました。日本からは西内先生(ペプチド研)、山崎先生(農業生物資源研究所)、野水先生(東京薬科大学)、向井先生(京都薬科大学)、南野先生(国立循環器病センター)、和田先生(東北大学)、梶原先生(横浜市立大)、が口頭発表されましたが、いずれの講演も活発な質疑応答がなされ、注目の高さが伺えました。私も修士の学生と2名で参加し、発がんタンパク質p53誘導性ホスファターゼPPM1Dに関するポスター発表を行ないました。

5日間の日程で開催された本シンポジウムは、熱帯に位置するケアンズの気候と習慣の関係上、カジュアルな格好での参加者も多く、講演会場ならびにポスター会場ではリラックスした雰囲気の中で活発な質疑応答が展開されました。学会期間中は天候にも恵まれ、中日の午後に設けられたフリーの時間には多くの参加者がグレートバリアリーフや自然豊かなキュランダ高原へ足を延ばしていました。残念ながら私はフリーの時間は事務仕事でホテルにこもっておりましたが、同行した学生は私を一人ホテルに残し、船で島に渡りダイビングを楽しむなどオーストラリアの海を満喫しておりました。

4th IPSに参加して私が感じたことは、ポスター会場における若者の活発な質疑応答の光景でした。海外の学生の積極的なところは国際学会に参加するたびに感じるところではありますが、本シンポジウムのポス



図1 会場のCairns Convention Center



図2 私は行けなかったグレートバリアリーフのビーチ



図3 ケアンズ名物マッドクラブ

ター会場では、日本から参加していた学生も海外の学生に負けずに積極的にディスカッションしている光景をよく見ました。私と同行した学生にとっても初めての海外学会だったため、最初のうちはかなり緊張していた様子で心配しておりましたが、次第に慣れてきたのか学会の終盤にはポスター会場で自分から積極的に質疑応答を行なうまでになっていました。南国でカジュアルな雰囲気という環境も一因とはおと思いますが、このような積極的な日本の若者の姿を見てうれしく思うとともに、自分自身も『もっと頑張らないかな』と感じたシンポジウムとなりました。

これまでIPSに参加されたことのない方、特に若い学生の方々にお伝えしたいことと致しまして、同世代の海外の学生(研究者)と話すことも自身の研究へのモチベーションの向上に繋がります。このようなことは国際学会参加することによりはじめて実感できることだと思います。私は京都で開催された1st IPSに参加して、刺激を受けたことが留学を決めたきっかけの一つとなっております。来年開催される5th IPSにも多くの若手研究者が集まり、刺激を受けて研究の向上や自己啓発のよい機会になればと願っております。

ちゅうまん よしろう
北海道大学大学院理学研究院
化学部門生物化学研究室
chuman@sci.hokudai.ac.jp

第4回 International Peptide Symposiumに参加して

<はじめに>

関西学院大学理工学部の山口宏先生と近畿大学理工学部の日高雄二先生のもとで研究を始め、6年目を迎えようとしています。今回、九州大学大学院理学研究院の松島綾美先生から、2007年の秋に日高先生と一緒に参加した第4回IPSにつきまして、執筆の機会をいただきましたので、体験談を述べさせていただきます。

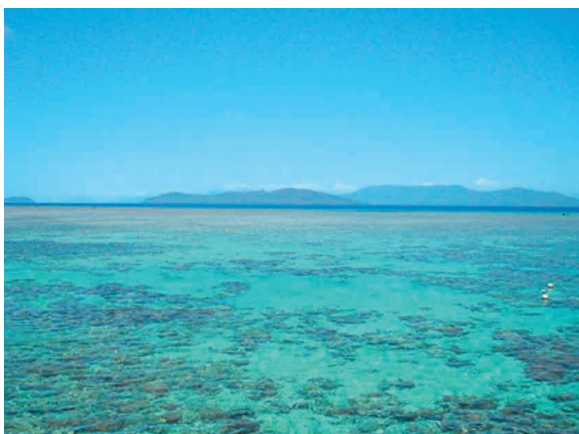


奥村 正樹

<第4回 IPS>

南半球で初めて開催されたペプチド国際学会である the 4th International Peptide Symposium (IPS) は, the 2nd Asia-Pacific Peptide Symposium と the 7th in the Series of Australian Peptide Conferences の合同で, 2007年10月21日から25日まで, オーストラリアのケアンズで開催されました。ケアンズは, オーストラリアのクイーンランド州の最北端に位置し, グレートバリアリーフといった観光産業が盛んな街です。また, 治安がよい, 時差が少ない, 親日であるといった理由から, 日本人のワーキングホリデーが多いといった特徴も挙げられ, 街には多くの日本人が溢れていました。そのため, 殆どの場合, 日本語が通じ, 滞在に関しては, さほど英語の必要性を感じませんでした。開催時期は初夏にあたりますが, 昼夜の寒暖の差が15℃前後もあり, 私は十分に温度調節をできるように服を用意しておくべきでした。また, ケアンズは, 自然に恵まれ, 海に面しているため, 様々な動物や鳥が多く生息していました。ケアンズというとグレートバリアリーフが有名ですが, こういった様々な動物が生息しているといった環境から, バードウォッチングや Night Zoo といったツアーも多くありました。特に, 動物園は, ワニに始まり, ワニに終わるというぐらい, ワニだらけでしたが。先生と私は, 学会開催中の中日の午後(海外の学会では, 開催中に Free Afternoon として, 観光の時間があります), グレートバリアリーフへのツアーに参加し, 素晴らしい海と自然に触れあい, 日頃の忙しさを忘れた一時の休息を得ることが出来ました。

第4回 IPSは, 多くの緑に囲まれた Cairns Convention Center にて開催され, シンポジウム主催は, John Wade 先生と Ian Smith 先生が務められました。学会の参加者は400人程で, 日本のペプチド討論会とほぼ同じ規模であり, 日本からは, その1割の40人程の研究者が参加していたように思います。シンポジウムは, From Discovery to Therapeutics といったテーマで行われ, また各セッションは Protein Misfolding and Disease や Peptides as Drugs in Infectious Diseases などの16分野に分類されていました(詳細は学会HPで公開されている 7th APC Symposium Proceedings を参照: <http://www.peptideoz.org/proceedings.php#>)。特に, Drug 開発と医療に関連した多くの発表がありました。発表そのものは, 口頭・ポスター発表ともにラフでカジュアルな格好で行われて



青い空と青い海 (グレートバリアリーフにて)

おり, 国内の学会と違った特徴も新鮮であり, 院生の私にはフランクに議論しやすい環境でした。また, ポスターセッションの時間も長く取られていて(約200件のポスター発表を2日に分け, 各2時間半), ゆっくりと談笑を交えながら話をできたことと思います。私は, 今回「Role of Pro-leader Sequence of de novo Designed-Disulfide Hybrid Peptides」という演題で報告しました。本内容はタンパク質の折りたたみ問題や人工タンパク質の創製へのスキヤホールドとなる研究であり, 内外問わず多くの聴衆を集めることができました。しかし, 多くの日本人研究者が抱えている問題である「英語表現」の難しさを痛感し, 同時に, 研究留学を自分に課す必要性を感じました。特に, 海外の若い研究者が英語で堂々と討論している姿には, 研究をアピールするための語学力の重要性を痛感しました。

学会最終日には, Farewell Dinner が会場に特設された Open Garden で行われ, バーベキューパーティーという, ペプチド討論会の懇親会とはまた異なった雰囲気でした。フォークバンドによる生演奏もあり, 陽気で明るいフランクな会でした。そのため, 国外の有名な先生とも, お酒を飲みながら, 私のつたない英語でも楽しく話をさせていただくことができ, 多くのことを学ぶことができたと思います。

<おわりに>

私は, 常に, 世界中の研究者が切磋琢磨し, 信念を持って研究するというスタンスが重要だと考えています。このような国際学会を通じて, それを肌で感じる経験は, 私の良い糧になったと思います。また, 第4回 IPS を通じて出会った同世代の情熱を持った研究者たちとは, 今尚, 良い交流をしています。

最後になりましたが, 国際学会への発表の機会を与えていただき, また, 今回の執筆をご推薦いただいた日高雄二先生に感謝いたします。また, 自由に研究させていただいている山口宏先生に厚く御礼申し上げます。並びに, 参加渡航費の一部を援助していただいた日本ペプチド学会と選考委員の先生方に深く感謝いたします。

おくむら まさき
関西学院大学大学院理工学研究科 化学専攻
ajm26751@kwansai.ac.jp



ホテルから見える学会会場 (写真建物の左奥)

第5回国際
ペプチドシンポジウム開催にあたって

会員の皆様もすでにご存知のように、2010年12月4日～12月9日まで国立京都国際会館におきまして、第5回国際ペプチドシンポジウム(5th IPS)が開催されます。本シンポジウムは日欧米豪および韓国、インドの各ペプチド学会ならびに中国ペプチドコミュニティの主催で、第47回ペプチド討論会と合同での開催となります。1997年第1回国際ペプチドシンポジウム(1st IPS)が、下西康嗣実行委員長(開催当時:大阪大学教授、現長浜バイオ大学学長・大阪大学名誉教授)のもと京都・京都会館で開かれて以来の日本での開催です。



木曾 良明

学会員の皆様にはご存知の方も多いと思いますが、国際ペプチドシンポジウム開催にあたって本学会が果たして来た役割について振り返ってみたいと思います。日本ペプチド学会の前身である日本ペプチド化学討論会世話人会では、世界中のペプチド科学研究者の研究情報の交換、討論および交流の機会として、「国際ペプチドシンポジウム(IPS)」を行う必要性が指摘されておりました。しかし当時欧米ではそれぞれ、European Peptide Symposium (EPS), American Peptide Symposium (APS)を国際的なシンポジウムとして隔年で開催しており、それとは別の国際ペプチドシンポジウムを開催する機運は成熟していませんでした。そこで日本のペプチド化学討論会世話人会ならび

に日本ペプチド学会は、独自の取り組みとして1987年神戸で第1回JASPEC (Japan Symposium on Peptide Chemistry)を、1992年静岡で第2回を開催しました。

1989年にはサンディエゴで開かれた11th APS会期中に、各国の主だった人たちが集まって国際リエゾンコミティーが開催されました。この時、国際的なペプチド研究者の連携についてアメリカ側とヨーロッパ側とで激しい論争が行われました。その際、ヨーロッパと日本は選挙で選ばれてきた役員が参加したのに対し、アメリカも含めたほかの国は組織ができていなかったもので、その点をヨーロッパ側に指摘された米国がその場を引き下がり、後にアメリカペプチド学会が組織されて、民主的な選挙が行われるきっかけとなりました。このように、国際間で、それぞれの国の立場を他の国の人に理解してもらうのは骨の折れることで、日本のことを世界の、特に欧米の人達にアピールするのは大変でした。

この後国際リエゾンコミティーが毎年開催されるペプチド関連シンポジウムの際に開かれ、長い交渉の末

| | |
|---|--|
| <p>Greetings</p> <p>It is a great pleasure and honor to host the 5th International Peptide Symposium in Kyoto, in conjunction with the 47th Japanese Peptide Symposium. To do this, I would like to thank the members of the 5th International Peptide Symposium, and the members of the 47th Japanese Peptide Society. The Symposium will feature the latest research in peptide science. International participation is encouraged. The Symposium will be held in Kyoto, Japan, from December 4-9, 2010. The theme of the Symposium is "Peptide Science: History and Perspectives".</p> <p>The history of the International Peptide Symposium (IPS) goes back to 1987, when the first symposium was held in Kyoto. The IPS was held in San Diego, U.S.A. (1992), followed by the 3rd IPS in Prague, Czech Republic, and the 4th IPS in Osaka, Australia (2005). This will be the second time for the IPS to be held in Japan.</p> <p>Since 1989, the IPS has offered wonderful occasions in the growing number of symposia that have been held. We will be happy to provide you with the same level of service and facilities as we have provided in the past. We hope you will have a successful and enjoyable stay in Kyoto.</p> <p>We look forward to seeing you at the 5th IPS.</p> <p>Yoshiki Kim, Chair Nobutsuka Fuji, Co-Chair</p> | <p>Organizing Committee</p> <p>Chair: Yoshiki Kim (Japan)</p> <p>Co-Chair: Nobutsuka Fuji (Japan)</p> <p>Executive Committee: Nobutsuka Fuji (Japan), Yoshiki Kim (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan)</p> <p>Local Organizing Committee: Nobutsuka Fuji (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan)</p> <p>Scientific Committee: Nobutsuka Fuji (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan)</p> <p>Program Committee: Nobutsuka Fuji (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan)</p> <p>Local Organizing Committee: Nobutsuka Fuji (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan), Kazuo Arai (Japan)</p> |
|---|--|

5th International Peptide Symposium
in conjunction with **47th Japanese Peptide Symposium**

December 4-9, 2010
Kyoto International Conference Center (Kyoto, Japan)

Under the Auspices of the Liaison Committee of International Peptide Societies:

- American Peptide Society
- Australian Peptide Association
- Chinese Peptide Community
- European Peptide Society
- Indian Peptide Society
- Korean Peptide Protein Society
- Japanese Peptide Society

In Cooperation with:

- The Pharmaceutical Society of Japan
- The Chemical Society of Japan
- Japan Society for Biochemistry, Biotechnology, and Agrochemistry
- The Japanese Biochemical Society
- Protein Science Society of Japan
- Japanese Society for Chemical Biology
- The Society of Synthetic Organic Chemistry, Japan
- Japanese Society for Proteinases in Pathophysiology
- Japanese Society for Bioinformatics
- Center for Frontier Research in Medicinal Science, Kyoto Pharmaceutical University

Supported by:

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) of Japan

www.5ips.jp
First Announcement

Hosted by **Japanese Peptide Society**

Welcome to Kyoto, Japan

Kyoto has a reputation worldwide as the most beautiful city in Japan. It boasts of 2,000 temples, shrines, and other historical assets including 17 World Heritage sites. Ever since it was built by the Emperor in 794, this old capital has flourished over the millennium, and left us a tremendous legacy of Japanese traditions and cultures. Today, Kyoto is also highly regarded as a leading intellectual center in the country, fostering many universities and research institutes, as well as large corporations and venture companies in science and technology. Kyoto, old but new, attracts many people around the world with its beauty, elegance and sophistication.

The nearest airport to Kyoto is Osaka Kansai International Airport (KIX). Kyoto is easily accessible from other major cities in Japan, such as Tokyo, Yokohama, and Nagoya, by bullet train (Shinkansen).

Kyoto International Conference Center (ICC Kyoto)

Since its foundation in 1966 as the first full-scale convention hall in Japan, ICC Kyoto has provided an excellent venue for numerous events and conferences. While conveniently located to the north of central Kyoto (20 min from Kyoto Station by subway), ICC Kyoto also enjoys the natural beauty of Lake Takaragasaki and its surrounding mountains.

Important Dates

Final Announcement and Call for Abstracts: May 2010
Abstracts Submission Deadline: July 2010
Early Registration Deadline: September 2010

Symposium Secretariat

5th IPS
c/o Congress Corporation
3-6-13 Awajimachi, Chuo-ku
Osaka 541-0047
Japan

Website: www.5ips.jp
E-mail: info@5ips.jp

に1997年に1st IPSが、日欧米豪の4ペプチド学会の主催で京都で開催されるに至りました。このことは日本ペプチド学会が国際的なペプチド科学研究者の連携、交流に大きな役割を果たしてきたことが評価された結果でもあります。

この後は皆さんもご存知のように、第2回は2001年に米国・サンディエゴで、第3回が2004年にチェコのプラハで、第4回が2007年にオーストラリア・ケアンズで開催されその歴史を積み重ねております。今回日本で開催する第5回の開催については、2003年に米国・ボストンで開催された18th APSの際の国際リエゾンコミティーで審議・承認され、また2004年プラハで開かれた3rd IPSの時の国際リエゾンコミティーで確認されました。5th IPSは、京都大学の藤井信孝教授と私がCo-Chairを努めさせていただきますが、現在組織委員会ならびにプログラム委員会の人選を終え、メール会議によりScientific Topicsや招待講演者の審議を行い、またさらに広く5th IPSの開催を知っていただくためのFirst circularの作成など開催準備を進めております。

今回の5th IPSは世界的にも厳しい経済状況の中での開催となることが余儀なくされております。会員各位におかれましては、ご参加・ご協力のほどどうぞ宜しくお願い致します。また本国際シンポジウムの前後のサテライトシンポジウム等、積極的に企画いただければ幸いに思います。

本シンポジウムは文部科学省科学研究費補助金の助成を受け、また各種学会からの協賛もいただいております。詳しくは、ホームページ(www.5ips.jp)に掲載しています。上記の1st circularを参考にしてください。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

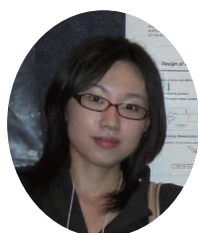
きそ よしあき
京都薬科大学
創薬科学フロンティア研究センター
kiso@mb.kyoto-phu.ac.jp

第42回若手ペプチド夏の勉強会開催報告

今年で第42回を迎えた若手ペプチド夏の勉強会は、東京薬科大学薬学部病態生化学教室(野水基義研究室)と同大学薬学部薬品化学教室(林良雄研究室)がお世話さしていただき、去る平成21年8月2日から4日までの3日間、東京都八王子市の八王子セミナーハウスに於いて開催致しました。今年も早くからたくさんのお問い合わせを頂き、最終的には全国から130人(運営スタッフ24人を含む)を超える多くのペプチド若手研究者の方々に参加いただきました。一方で、日程の都合により参加できなかった方々がおられましたこと、心からお詫び申し上げ



保住建太郎



山崎 有理

げます。また、今年は開催地が東京ということもあり、参加費の設定が例年に比べ少々高めになってしまいました。しかしながら今年もJPSから運営費の一部を、また各方面からも資金面でご援助をいただき、おかげで盛大に勉強会を開催することができました。参加者を代表して、関係各位に厚く御礼申し上げます。

3日間の勉強会では5件の特別講演、2件の留学体験記、テクニカルセミナー、研究室紹介(24研究室または企業)、11件の一般講演、10件のポスター発表がありました。特別講演として、白楽ロックビル先生(お茶の水女子大学)「研究者倫理について考える」、岡田弘晃先生(東京薬科大学)「ペプチドを用いた創薬とDDS素材としてのペプチドについて考える」、重永章先生(徳島大学)「ペプチド・タンパク質機能制御法について考える」、西則雄先生(北海道大学名誉教授)「ペプチド化学よりDNA材料化学へ—その軌跡について考える」、兼子博章先生(帝人株式会社)「医療材料研究と事業化について考える」にご講演をいただきました。今年はこれらの特別講演の座長は、学生の皆さんにお願いしました。

また、留学体験記として東京医科歯科大学の鳴海哲夫先生(ペンシルバニア大学への留学)、京都府立医大の服部恭尚先生(米国NIHへの留学)のお二人にご講演いただきました。さらには、テクニカルセミナーとして株式会社菱化システムの狩野敦さんにお越しいただき「生命科学・創薬研究における分子設計ソフトウェアの利用」というタイトルでMOEを用いた分子モデリングについてご紹介と説明をいただきました。

大学院生による一般講演には11件の応募をいただき、どの発表者も自分の研究内容がしっかりとまとめられており、発表後の質疑応答には学生同士で活発なディスカッションが行われました。また、今年は研究室紹介(1日目)とは別にポスター発表も企画しました。こちらは10件の応募がありました。2日目の夕食後に行われたポスター発表は各々3分間の口頭発表による内容説明の後、自由討論を行いました。自由討論は、各々の参加者が飲み物を片手にリラックスした雰囲気で行われました。22時の講義室が閉まる時間ギリギリまで討論が続いていたのは予想外のことであり、これは大変嬉しいことでありました。

また、1日目、2日目の晩に行った懇親会も、いつものように大盛況であったように思います。今年は懇親会の会場として、大きな一つの部屋しか借りることができなかったのが良かったのか(悪かったのか)、深夜まで大勢の参加者がわいわいと交流を深めていました。新しい仲間もできたのではないでしょう。

さて、例年通り勉強会における各種の優秀賞を設け、参加者の投票により4人の学生さんを表彰させていただきました。学生討論部門優秀賞に徳島大学山本純さん、一般講演部門優秀賞に阪大蛋白研 中



村健一郎さんと京都大学 山口貴宏さん，ポスター発表部門優秀賞に東京薬科大学 石川晶也さんが選ばれました。おめでとうございます。受賞者の方々には賞状と副賞を贈らせていただきました。

今年は新型インフルエンザの流行で，特に関西地区では5月ごろから休校が相次ぎ，そのしわ寄せから来る補講で勉強会に参加できないとの連絡もありました。実のところ，本勉強会についても中止ということも含めて検討させていただいておりましたが，その様な状況の中で参加いただき，特別講演を引き受けて下さった先生方を始め，学生や職員の皆様には深く感謝しております。

次回（第43回）の勉強会は，徳島大学の重永章先生が世話人となり，兵庫県淡路島（ウェルネスパーク五色）にて開催が予定されています。今回，特別講演に来ていただいた先生からも若手ペプチド勉強会の活発さに対して評価を頂き，大変光栄に思いました。今後もこれまでの反省をふまえ，さらに発展させながら若手ペプチド夏の勉強会を永く続けていくことができればと思います。

ほずみ けんたろう
東京薬科大学薬学部
病態生化学教室
hozumi@toyaku.ac.jp
やまざき ゆり
東京薬科大学薬学部
薬品化学教室
yuyama@toyaku.ac.jp

編集後記

今年11月には，第46回のペプチド討論会が北九州で，そして，来年2010年には，再び日本で国際ペプチドシンポジウム（IPS）が開催されます。そこで，今回はIPS特集を企画いたしました。IPSのはじまりについて，突然の執筆のお願いながら，当時の状況を克明にご紹介頂きました榊原先生に深謝申し上げます。さらに，第1回IPS組織委員長の下西先生をはじめ，「若手が国際学会に参加しようと頑張って実験したくなるようなお話をお願いします」という急な依頼にもかかわらず，数年～10年以上も昔の記憶を快く辿って頂いた先生方に心より感謝申し上げます。

PEPTIDE NEWSLETTER JAPAN

編集・発行：日本ペプチド学会
〒562-8686 箕面市稲4-1-2
(株)千里インターナショナル内

編集委員

野水 基義（担当理事）
（東京薬科大学薬学部）
TEL・FAX 042-676-5662
e-mail: nomizu@ps.toyaku.ac.jp
坂本 寛（九州工業大学大学院情報工学研究院）
TEL 0948-29-7815, FAX 0948-29-7801
e-mail: sakakan@bio.kyutech.ac.jp
玉村 啓和（東京医科歯科大学生体材料工学研究所）
TEL 03-5280-8036, FAX 03-5280-8039
e-mail: tamamura.mr@tmd.ac.jp
松島 綾美（九州大学大学院理学研究院）
TEL 092-642-4353, FAX 092-642-2607
e-mail: ayami@chem.kyushu-univ.jp
北條 裕信（東海大学工学部）
TEL 0463-58-1211（代），FAX 0463-50-2075
e-mail: hojo@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

（本号編集担当：松島 綾美）